佐倉時代まつり／桜に染まるまち佐倉 4月9日(土)　4月10日(日)特別企画　佐倉城下町商店会主催

長唄の魅力

4月9日(十)

塩原庭村　日本伝統音楽 長唄 唄方、演出家 東京藝術大学音楽学部邦楽科卒在学中に稀音家浄観賞受賞。杵屋五三吉、初代杵屋三左、三代目杵屋三左衛門、各師に師事し、杵屋三七郎の名を許され長唄唄方として舞台に立つ。また、大本山妙心寺大法院閑栖 松岡宗訓調 師に入門し、茶道、花、書を学び薫陶を受け「庭村」の号を賜る。2020 年、杵屋三七郎の名を返上し、「塩原庭村」に改名する。TV、ラジオをはじめ、歌舞伎公演や舞踊公演、海外公演、音楽デザインなど近年の活動は多岐にわたる。(中略)

邦楽囃子の魅力

4月10日(日)

望月太佐乃　私立国府台女子学院中学・高等科卒 東京藝術大学邦楽科邦楽囃子専攻・大学院能楽囃子修士課程修了邦楽囃子を望月太左衛師 能楽観世流太鼓を故観世元伯師に師事日本各地や海外で演奏の他、大河ドラマやラジオ出演 CM アニメ新作歌舞伎等の録音に携る(社)長唄協会会員 東京都キッズ伝統芸能体験講師

両日共に 13 時開場 13 時半開演先着 20 名様　入場料 1000 円　要予約 043-481-3939 スタジオ SAINT.D

ドラゴンへの階段 第㉟回（連載エッセイ版）

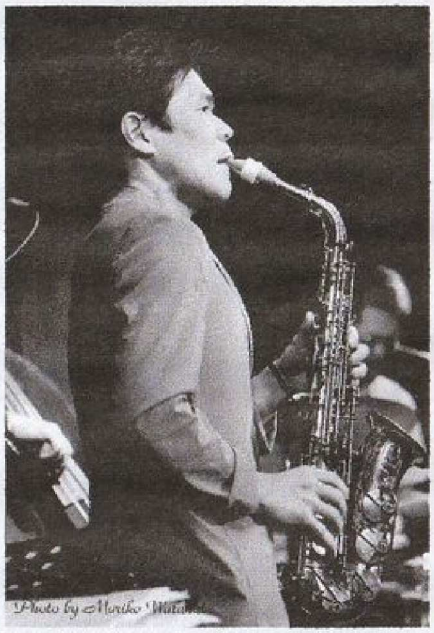
「意志を表現する言葉」

佐藤　洋祐

皆さん、こんにちは。日中の外気温が20度を超え、花粉に目の潤む頃。まだ冷めた朝方の静かな空気には澄んだウグイスの声が響きます。梅は咲いたか、桜はまだかいな。咲く花、動き出した虫たち、鳥たちの声、霞たなびく空、久しぶりの雷の音、そしてほこり臭いような春雨の香り。あらゆる生命、自然の営みが、音や色彩など、彼ら独自の言葉で語りかけるのがより大きく聞き取れる、そんな季節になってきました。

そう、生命はいろいろな形をとって、彼らの言葉で語りかけます。鳥のさえずりはやってきた春をその小さな体いっぱいに謳歌していることを伝える音楽だし、冬の白黒の世界の中でその蕾をじっくり膨らませてきた植物たちは、色鮮やかな花々を一気に咲かせ生命を礼賛する絵画を完成させます。彼らの言葉は音だったり、色彩だったりいろいろですが、それらの言葉は一様に彼らの「意志」を、「生きようという意志」を私たちに表現します。

まだ生命が今この地球上にいる生き物たちのような見た目をしていなかった頃、まだ一つの細胞に過ぎなかった頃、いえ、それよりもっと以前の、ただ原子が一つ、宇宙の片隅にぽつりとあった頃。それから気の遠くなる程の長い時間を経て、同時に奇跡中の奇跡としか言いようのない程の緻密な自然のバランスのもとに、私たちはこうして生きています。



佐藤　洋祐（サトウ ヨウスケ）
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を２度受賞。２０１５年末より佐倉市在住。２０１９年よりシンガーとしても活動を開始。

私たちがまだ一つの細胞だった大昔、それでもその単純な細胞の中には生命の生きようとする「意志」のようなものが確実に存在していて、それが長い長い時間と、数えきれない程の生と死の繰り返しを経て、今の私たちにつながっているのかな。いや、そんな立派な細胞どころか、もっと前の段階、宇宙の闇に原子だけが存在していた時も、その一粒の原子の中に「生きようという意志」はひっそり存在していたのかな。誰にも聞かれることのないほどひっそりと、しかししっかりした言葉で、彼らはその「意志」を語っていた、それが私たちが生まれる素だったのではないのかな・・・。そのような思いを、この春の生き物たちが奏でる言葉を聞きながら、尽きることなく巡らせています。

だってね。もしそうであるとすれば、私たちに必要なのはこの地球上に住むありとあらゆる生き物たち、生命どうしの「調和」なのではないかな。こんな私のとりとめない考えに共感くださる皆さまも、そうでない皆さまも、私と同様に一つのちっぽけな細胞、原子だった事、そして今も同じであることを忘れないように、と思うのです。そして音楽家として考えるのは、もしその生き物どうし、人間どうしの「調和」が失われているとしたら、それをどのようにしたら取り戻せるのだろう、という事。調和に溢れた音楽が、聞く人々の心とも融合し、奇跡のようなバランスでその場が生命に溢れ、突如として活き活きとしてしまうようなあの感覚を、どのようにしてこの不調和な世界にもたらすことができるだろう。音楽には、何ができるだろう。

さて、最後になりますが、こうしていただいておりますエッセイの機会、今回が35回目でした。エッセイをはじめて次回で3年が経つことになり、当初、「3年でレコード大賞を狙うぞー」という企画からスタートしましたが、そちらは残念ながら完全な敗北、全くめどがつきません。しかし、世の中の一助となりたい気持ちに変わりはなく、少しでも力をつけて、という意味で、同じ目標をかかげてこれまで同様に走ってまいります。このエッセイの第50回に至る日まで、その目標の期日を引き延ばしてより力強く臨ませていただきます。皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます。（2022年3月13日筆）